講師 ： 河合章行
鳥取県地域振興部噴火政策課

「弥生時代の交流 ～山陰を中心に」 を聴いて

聴講日 ： H30.12.1
むきばんだやよい塾第19期

土器から見た交流の様相

大桷遺跡から出土した土器の時代区分をすると、A/縄文土器だけが出土する2500年前～2600年前、B/縄文土器に弥生土器が僅か混ざる2450年前～2500年前、C/両者が混ざる2400年前～2450年前、D/弥生土器だけになる2300年前～2400年前からの四つになります。出土する縄文土器は智頭枕田遺跡から出土する縄文土器に似ていて、岡山経由で智頭から伝播しているのが分かります。島根の方から日本海沿いを東進する弥生文化は倉吉平野付近で停滞し、鳥取平野には南から伝播する複雑な様相があります。

弥生中期には在地化する一方で、外来系土器も出土するようになります。また、鳥取のほうでは外来系土器の出土は少なくなる一方で、朝鮮半島に山陰系土器が伝播していることも確認されています。

石製玉類から見た交流の様相

玉に使われる材料は特定の産地のものに限られ、碧玉は佐渡と、新潟県小松市(地方)と、兵庫県豊岡市(女代南)と、島根県松江市(花仙山)の4ヶ所が主な原産地です。出土した玉製品を分析して素材がどこから供給されたか調べますが、産地が特定できない物もあります。将来発見される産地かもしれないので、女代南B群とか、未定C群とか、青谷上寺地B群とか、分類だけはしておきます。ところが、青谷上寺地から出土した玉には、菩提産(小松市)と判定された素材と、女代南B群と判定された素材が接合することがわかり、いままで産地不明とされていた女代南B群と判定された碧玉も小松市産であることが判明しました。

青谷上寺地遺跡では、弥生時代中期前葉から「菩提系碧玉」を用いた管玉製作が始まり、弥生時代中期中葉～後葉にはその盛期を迎えました。これは、消費地である北部九州と石材供給地である八日市地方遺跡の動向と連動しています。つまり、北部九州で「菩提系碧玉」製の管玉の需要が高まるとともに北陸の八日市地方遺跡へその情報が伝達し、北陸から日本海沿岸を介して石材や製品が北部九州に供給されたと考えられます。一方、北部九州から北陸へは鉄器がもたらされた可能性があります。このように、青谷上寺地遺跡は北部九州と北陸地方の間を取り持つ重要な中継拠点だったと考えられ、青谷上寺地遺跡において、早い段階から骨角器加工の先端技術や多数の鉄器が認められるのも、このような背景があったためと想定されます。

しかし、弥生時代後期になると、「菩提系碧玉」の供給地である八日市地方遺跡が衰退し、消費地の需要が満たされなくなりました。そのため、各地では緑色凝灰岩等に材質転換を図りますが、青谷上寺地遺跡ではそのような動きはほとんど認められません。花仙山産碧玉が北部九州にまで及ぶようになっても、青谷上寺地遺跡ではほとんど利用されず、青谷上寺地遺跡における管玉製作は終焉を迎えます。おそらく、青谷上寺地遺跡よりも東の地域で、花仙山産碧玉の需要が少なかったため、あまり流通しなかったものと考えられます。

その後、青谷上寺地遺跡における「ものづくり」の中心は、木製品に移っていき、花弁高杯をはじめとする秀麗な木製品が、青谷上寺地遺跡の重要な交易品として日本海沿岸の各地にもたらされることになります。

金属器から見た交流の様相

青谷上寺地遺跡から出土している漢鏡は、星雲文(鏡漢鏡Ⅲ期(BC1世紀前半)、八禽鏡(漢鏡Ⅳ期(BC1世紀後半)、内行花文鏡(漢鏡Ⅴ期(紀元1世紀)、重圏文鏡(漢鏡Ⅴ期(紀元1世紀)の4種類で、時期を通して流入していることがわかります。これは玉の重要な交易地点だったためと思われます。島根には弥生時代に漢鏡の出土はなく、古墳時代になってから古い漢鏡が古墳から出土しています。島根ではこのころ既に王権が形成されていて、伝世の風習が確立していたのかもしれません。

北部九州に次いで山陰は鉄器の出土が多く、中でも妻木晩田と青谷が双璧をなしています。玉の流通が始まる弥生時代前期の終りから中期にかけて鉄器の出土が見られ、玉の流通が増えると共に鉄器の出土も増えています。出土品には北部九州でも作れないような高い技術の鉄製品や大きなものも含まれています。また、遺跡内で独自に加工していたことが分かるようなものも見つかっていますので、技術者集団がいたことが分かります。

骨角器から見た交流の様相

遺跡から出土する骨角器には、ヤス先状、銛頭状、釣針形、ヘラ状、錘状、鏃形、根挟み形、鈎状、円盤状、弭状、ゆづか状、玉杖飾形、銅剣形、櫛状、箸状など様々な形状があります。またトに使ったものもあります。各形状の骨角器にはそれぞれの分布に特徴があり、列島の西と東には違いがあります。近畿から山陰にかけて東西の境界があるように見て取れます。また、鉄器の流通が増えだすと骨角器の加工も多様になり、出土数も増加しているのが分かります。

木製容器から見た交流の様相

青谷上寺地遺跡からは花弁高杯と呼ばれる木製品が出土しています。花弁高杯の出土分布は北九州から北陸まで日本海沿いですが、数的に多いのは山陰地方で、ここで作られたものが移動したものか、影響を受けて在地で作られたものだと推定されます。この時期は、玉の交易が細り始めた時期で、鉄を得るために玉の代わりの交易品となったのではないかと考えられます。花弁高杯のように他地域に伝播される木製品がある一方で、伝播していない精製容器も多数出土しています。

ガラス玉から見た交流の様相

青谷上寺地遺跡からは200点ほどが出土しています。風化して透明感を失っていますが、弥生時代にはカリガラス、ソーダ石灰ガラス、鉛バリウムガラス、鉛ガラスの四種類が使われています。ガラス小玉は引き伸ばし技法で作られますが、切断後に再度熱を加えて形を調整するのが一般的です。しかし、ソーダ石灰ガラスを素材とする小玉は作り方が粗雑で仕上げがされていないなものが、人骨が散乱して出土した**SD38KJA33244**の区画に限られて出土しています。また、この区画からは鉛ガラスの小玉も出土しています。鉛ガラスを素材とするガラス小玉は他に例がないほど珍しいものです。

まとめ

北部九州と北陸の結節点にあたるのが青谷上寺地や妻木晩田になり、韓国の勒島遺跡との類似性が指摘されています。勒島遺跡では脊椎カリエスの骨が出土していますが、青谷の骨の時期とは200年くらい遡っています。

今年になって青谷上寺地遺跡の人骨のDNA分析が行われ、11/19にその中間報告がありました。報道各社の内容は、次のようなものです。

“篠田副館長によると、九州北部の遺跡から出土した弥生前期の人骨の分析では、在来の縄文系と渡来系の遺伝子が見つかった。当時の人が両方の祖先を持っていたことを示しており、青谷上寺地遺跡の人骨についても、両方の遺伝子が検出されると予想していたという。しかし、今回DNAを抽出した人骨３２点のうち、３１点が渡来系で、縄文系は１点だけ。DNAの型は２９種類に分かれ、血縁関係がほとんどないことも分かった。青谷は遺跡の発掘調査から、大陸などとの交易拠点だったと考えられており、分析からも、多くの渡来人が入ってきて、交易で栄えていたことがうかがえるという。また、従来の研究では、稲作の普及や定住生活の広がりに伴って弥生後期には日本人の中に渡来系と縄文系が交ざっていたと考えられていた。しかし、今回の調査結果は定説に当てはまらず、篠田副館長は「これまでの説について発展的に考える契機になる」と述べた。”

弥生時代は、ソーダ石灰ガラスの小玉はまだ朝鮮半島にしかなかった時期です。弥生時代に出土が確認されるのは北部九州だけで、古墳時代前期でも列島では流通していませんでした。そんなガラス小玉と共に出土した青谷上寺地遺跡の人骨の中には、渡来系の人物も含まれていると以前から予想されていました。鳥取大学医学部の井上貴央教授は韓国の礼安里古墳群から出土している人骨と形質的に類似していることを指摘しています。人骨が埋められたのは三世紀前半と推定され、中国では魏が建国した時期ですので、鑑定された人骨は戦乱を逃れて列島に渡来した人たちだったかもしれません。